

国際水田・水環境工学会(PAWEES)2025において、「若手研究者賞」を受賞された神戸大学助教の園田 悠介先生に寄稿をお願いしました。

特別寄稿

園田 悠介

神戸大学大学院農学研究科 食料共生システム
学専攻 土地環境学教育研究分野 助教

昨年、International Society of Paddy and Water Environment Engineering (PAWEES) の Young Professional Award (若手研究者賞) を受賞する機会をいただきました。大変光栄に思うとともに、ご指導いただいた皆様、また寒い実験室で実験に取り組んでくれた学生の皆様に、心より感謝申し上げます。

当学会には、ため池に関する研究成果として二本の論文を投稿しました。詳細は割愛しますが、一つは「廃止ため池」を扱ったものです。ため池の廃止とは、堤体をV字に切る、堤体を除去する、もしくは貯水池を埋め立てるといった方法で水を貯めない状態にすることです。平成30年の西日本豪雨以降、利用されていないため池については廃止が進められています。先日、神戸市の方とお話した際には、市内約1500のため池のうち、500程度で廃止の要望があるとのこと(非公式な数字です)。日常風景の一部であったであろう「身近な池」が多く失われていくことに、どこか寂しさも感じます。

さて、私は廃止ため池自体が専門ではないのですが、ここでは少し「廃止(≠放置)」について書いてみたいと思います。モノを作ることに比べ、壊す、廃止することは意外と難しく、ため池でも、水不足への懸念、廃止後の管理、下流排水への影響、生物多様性など課題は多く、そもそも「何かを生み出さない事業に公的資金を投じるべきか」という議論もあります。しかし、今後は、人口減少の中で多くの施設を縮小・廃止していく必要があります。道路や橋、ダム、住宅、農地、鉄道やバス路線、さらには街そのものも対象となるかもしれません。一度作ったものを、安全かつ合理的に、関係者の合意形成を図りながらどのように廃止していく



PAWEES 盛岡大会 授賞式
(長野先生、撮影いただきありがとうございました)

のかは、これからの重要な課題の一つだと感じています。

原稿を書いている今まさに、第3次オイルショックとも言われる不安定な国際情勢をはじめ、人口減少、AIの進化、自然災害など、今後何が待ち受けているかわかりません。私は「迷ったときは困難な道を選ぶ。環境が人を育てる」という言葉を大切にしてきました(誰から言われたか忘れまし、実行できているかは別の話)が、今後も様々な環境の変化に対し、ときに慎重に、ときに大胆に新たな領域へ踏み出しながら、研究・教育を通じて社会に貢献していきたいと考えています。

最後になりますが、PAWEESの各賞において、本会の小前隆美 前会長が、国際賞(PAWEES International Award)、また長野宇規先生が論文賞(PAWEES Paper Award [Sawada Prize])をそれぞれ受賞されたと伺っております。心よりお祝いを申し上げ、本稿を閉じたいと思います。



堤体をV字に切って廃止したため池 (2022年現地調査)